マルクスと以前の社会主義者との違い

人がマルクスに賛成しないのは勝手だが、しかし、マルクスが以前の社会主義者にくらべ「新しいもの」である自身の見解をもっとも完全な明確さで定式化したことを、否定することはできない。この新しいものとは、これまでの社会主義者が、自己の見解を基礎づけるためには、現制度のもとでの大衆の抑圧をしめし、各人が自分でつくったものを受けとるような体制の優越性をしめし、この理想的体制が「人間の本性」とか理性的＝道徳的生活の概念、等々に適合していることをしめせば十分である、と考えていたのにたいして、マルクスは、このような社会主義に満足することは不可能である、と考えたことにあった。マルクスは、現代の体制を特徴づけ、それを評価し、非難するだけにとどまらないで、この体制を科学的に説明し、ヨーロッパおよびヨーロッパ以外のいろいろの国家で、いろいろに異なっているこの近代的体制を共通の基礎に、すなわち資本主義的社会構成体に還元し、この社会構成体の機能と発展との諸法則に客観的分析をくわえたのである（彼はこの体制のもとでの搾取の**必然性**をしめした）。それとまったく同じように、彼は、社会主義体制だけが人間の本性に合致するという主張――偉大な空想的社会主義者や、そのあわれむべき亜流たる主観主義社会学者たちはこう言ったのだが――に満足することを可能とは考えなかった。彼は、資本主義体制の同じ**客観的**分析によって、それの社会主義体制への転化の**必然性**を説明したのである。（彼が、これをまさにどのようにして証明したか、またミハイロフスキー氏がこれをどう反論したかという問題には、なおあとで立ちかえるおりがあろう。）　われわれがマルクス主義者においてしばしば見る、必然を言いたてることの根源は、まさにここにあるのである。

第一巻　「人民の友」とはなにか　P152~153

コメント

マルクスは社会主義を理性的＝道徳的な願望として見るのではなく、資本主義体制の**客観的**分析を通じてその必然性を証明した。